

会話における陳述に対する応答について (その1)

服部 幹雄

On Responses to Statements in Conversation (Part 1)

Mikio HATTORI

0. はじめに

会話分析は現実の会話を言語学的にさまざまな角度から分析し、会話の構造や管理方法を発見することを目標とするが、その中心的課題は「発話がいかに合理的、規則的に連続していくか示す」¹ことにあると言ってよい。しかし、会話は「高度に構造化されていると同時に非常に予測不可能である」²ため、先行発話に何が続くかを統語論で見られるような規則で記述できるのかという疑問が常に付きまとう。実際、会話分析の研究者たちは、経験的・帰納的アプローチを重視し、内省による発話の適格性の判断をなるべく排除してきた経緯がある。本稿は、会話の参加者が持ち合わせている情報のなわばり関係³に基づいて、陳述-応答の隣接対句⁴における応答の形式を、その最初に生ずる要素に焦点を当てて解明しようとする試みである。それにより、会話の連鎖にはかなり強制的な制約があり、したがって高い予測性を持つ規則が存在することを指摘しようとした。また、しばしば見過ごされがちなポーズ(erなどの filled-pauseも含む)や談話標識が決して恣意的なものでなく、会話において不可欠なものであることを再確認することで、語用論研究における理想化された人工的データの限界もおのずと明らかになるであろう。分析に当たっては、実際の会話データから繰り返し起こるパターンを考察するという帰納的方法によったが、母国語話者による内省や人工的データも援用し、会話の規則や発話の適格性の条件を抽出しようとした。⁵

隣接対句において先行発話に何が続くかという予測を行っている研究としては Labov and Fanshel (1977)がある。これは話し手(A)と聞き手(B)の持ち合わせている情報に基づいて聞き手の応答が予測されている点に特徴がある。Labov and Fanshelは次のような定義と予測を提唱している。

(1)

A の開始発話	B の応答
A 事象 (A に知られている事象)	最小限の認知
B 事象 (B に知られている事象)	確認
A が陳述する事象	最小限の応答
AB 事象 (AB 双方に知られている事象)	最小限の応答
O 事象 (その場にいる全員に知られている事象)	評価
D 事象 (議論の余地があることが知られている事象)	

(Labov and Fanshel 1977)

Labov and Fanshel は、残念ながら、これらの予測を現実の会話データに照らして実証することを行っていない。したがって、B の応答の具現形がいかなるものであるのか、最小限の認知と最小限の応答とはどう違うのか、また最小限とはどの程度のものを指すのかなど不明確な点が多い。しかし、Stubbs (1983) が、A 事象、B 事象、AB 事象についての陳述の後では yes と no の生起可能性が異なることに言及していることは注目に値する。すなわち、yes と no は、A 事象についての陳述の後では不適切であり、B 事象についての陳述の後では対立分布を、AB 事象あるいは O 事象についての陳述の後では相補分布をなすことが指摘されている。

神尾(1990)は、情報のなわばり理論に基づき、隣接対句について次のような予測を行っている。

(2)

	話し手	聞き手
a.	A	C
b.	B	B
c.	C	A
d.	D	D

A の場合：情報が話し手のなわばりに属し、聞き手のなわばりに属さない

B の場合：情報が話し手聞き手双方のなわばりに属する

C の場合：情報が聞き手のなわばりに属し、話し手のなわばりに属さない

D の場合：情報が話し手聞き手双方のなわばりに属さない

(神尾 1990)

たとえば、a. の場合、話し手は直接形で発言し、聞き手の応答は間接形で行われると予測される。神尾はそれぞれの状況下での対話を例示しているが、それらがきわめて自然であることから、上述の予測が裏付けられるものとしている。だが、現実の会話に基づく実証は行っていないため、ポーズ、談話標識などはまったく考慮されていない。神尾はさらに Labov and Fanshel (1977) にも言及し、彼らの定義が「知っている・知られている」に基づくものであることから、その言語学的な意義を疑問視している。情報のなわばり理論にしたがえば、ある情報が話し手のなわばりに属しているかどうかという問題は、話し手がその情報を「知っている」か否かという認識の問題とは無関係であるから、これはもっともな批判であると思われる。しかし、Stubbs (1983) によると、Labov and Fanshel による A (B) 事象の定義は、話し手(聞き手)が優先的に接近する特権が与えられている情報という意味であって、聞き手(話し手)がその情報について何らかを知り得ていることを妨げるものではない。その意味で A (B) 事象は情報のなわばり理論における「話し手(聞き手)のみのなわばりに属する情報」に近い概念であると言える。同様に、AB 事象、O 事象も「話し手聞き手双方のなわばりに属する情報」と重なり合う部分が多いと考えられる。したがって、情報のなわばり関係に基づいて応答の形式を考える上で、Labov and Fanshel の予測が有益な指針になることは疑いない。

以下、情報のなわばり理論の予測を、(2) の a, b の場合について、応答の move⁶ の最初に現れる要素に焦点を当てて、現実の会話のデータに基づき実証していく。c, d の場合は Part2 で扱う予定である。

1. a. の場合の応答の形式

まず、話し手のなわばりのみに属する情報についての話し手の陳述に対する聞き手の応答に

ついて検討する.⁷ ここでは、情報が話し手のなわばりには属するが、聞き手のなわばりには属さないという状況にあるから、話し手の陳述は直接形によって表現される。一方、応答を行う聞き手の側から見れば、逆の事例が成立していることになる。すなわち、聞き手は間接形を用いて応答することが予測される。(3)はこの場合の典型的な隣接対句である。

- (3) A: John has already returned home.
B: It looks he has.

(神尾 1990)

(3)は極めて自然であり、この予測は正しいと考えられるが、現実の会話においては、応答の move の最初に間接形の陳述が現れることはあまり見受けられない。この位置で最も頻繁に観察されたのは、Labov and Fanshel が A 事象についての陳述に対する応答において予測した最小限の認知という act であった。

- (4) A: I wanted to avoid that.
B: [mhm mhm] ↓ [m] ↓⁸
- (5) A: I was very surprised indeed.
B: Yeah ↓.
- (6) A: They're going to buy a place in England, a smaller place nearer London.
B: [m] ↓
- (7) A: Sparklers are my favorites.
B: [m] → Catherine wheels are my favorites.
- (8) A: I'm struck by the number of American applicants.
B: Yeah ↓.
- (9) A: I've been a friend of Malcolm's mother for donkey's years.
B: Have you ↓.
- (10) A: A symptom's something the patient complains of. The sign is something the doctor elicits.
B: Oh, Jesus ↓. (laugh)
- (11) A: Charlotte's grandfather was born in the reign of William the Fourth.
B: Oh, heavens ↓. So was mine.

認知の具現形として最も頻繁に生起しているのは下降調で発音される [m], [mhn mhm], yeah であるが、(くすくす)笑い、うなずきなどの非言語的行動も多く見られる。また、先行発話が聞き手にとって新情報である場合は oh, really や do you, is it 等内容について問い直す表現が多く見られた。興味深いのは、先行発話を明示的に支持する下降調の yes/no, that's right, you're correct, exactly などがほとんど見られなかったことである。実際、(4)~(8)における認知の act を下降調の yes/no, that's right, you're correct, exactly に置き換えてみると容認度は著しく低下することがわかる。⁹ つまり、この状況における認知の act の具現形には何らかの制約が課せられていると考えられる。次の仮定的例で検討してみよう。

- (12) A: I'm sleepy.
B: Yeah ↓.
??Yes ↓./*No ↓.
??That's right ↓.
??Exactly ↓. (fabricated)

(13) A: I must be going. I have a meeting at four.

B: Yeah ↓.

??Yes ↓ ./ *No ↓.

??That's right ↓.

??Exactly ↓. (fabricated)

(14) A: That star is 200 light-years away from us.

B: Yeah ↓.

??Yes ↓ ./ *No ↓.

??That's right ↓.

??Exactly ↓. (fabricated)

話し手のなわばりのみに属する情報で最も典型的なのは、心理文のように話し手にしか知覚し得ない情報であろう。(12)においてAはこの発言で初めて「自分は眠い」という情報をBに伝えているものとする。つまり、BにとってAの発言に含まれる情報は新情報ということになる。ここでBが下降調のyes/noで応答するのは極めて奇妙である。ところが、興味深いことに、yesの変異形と考えられるyeahはごく自然に用いられる。ではAの発言に含まれる情報がBにとって旧情報である場合はどうであろうか。今度は(12)の会話が行われた状況を次のように仮定してみよう。すなわち、BはAの妹で、Aが前日の晩は徹夜に近い状態だった、あるいは逆に毎日10時間寝ていることを知っているものとしよう。この場合でもyes ↓, that's right ↓, exactly ↓で応答するのは、容認度はわずかに向上するものの、なお不自然である。no ↓による応答は極めて不自然であることに変わりはない。ただし、Yes, you must be./No, you can't be.のようにyes/noの直後に間接形の表現が後続し、発言全体が1つの音調句で発音されるならかなり自然になる。¹⁰が、親しい間柄で発言される場合を除き、通例かなり非礼な印象を与えるようである。

(13)において、Aはある会社の部長であり、BはAの社外の親友であるとしよう。また、BはAの発言を聞いて「Aが4時から会議がある」という情報を初めて得たものとする。「4時に会議がある」という情報は、Aの確定している行動予定であるということに基づいて、Aのなわばりに属する。Bは社外の人間であるため、この情報は彼のなわばりには属さない。つまり、話し手が自分のなわばりのみに属する情報を表現し、聞き手がそれに応答するという状況の一例である。この場合も、Bが下降調のyes/no, that's right等で応答するのは極めて不自然である。それでは、Aの発言以前に、BがAの発言に含まれる情報をAの秘書から聞いて知っていたとしたらどうであろうか。この場合、yes ↓, that's right ↓, exactly ↓については若干容認度が上がるが、その使用は依然として不自然である。no ↓は、BがAの述べた情報が誤っていると確信していても、極めて不自然な応答であることに変わりはない。ちなみに、この場合の反駁は、Do you?, er, well, wasn't that later?のように沈黙、er等のポーズ、well等の談話標識を含んだり、訂正情報の提供にあたっては、過去時制を用いたり、「4時ではなく5時に会議が始まる」という明確な情報を持っていてもlaterと曖昧にする表現が用いられるなど極めて慎重な形式で行われる。なお、訂正情報が疑問文や間接形で表現されることは言うまでもない。

(14)は天文学の専門家が素人に向かって発したものである。そして、BはAの発言に含まれる情報をAに知らされるまで知らなかったものとしよう。「あの星が200光年離れている」

という情報は A の専門領域に関する情報であり、A のなわばりに属する。一方、B は素人であるので、この情報を近とする理由はなく、そのなわばりには属さない。これも、話し手が自分のなわばりのみに属する情報を表現し、聞き手がそれに応答するという状況である。ここでもまた、B が下降調の yes/no, that's right 等で応答するのは極めて奇妙である。また、A の発言に含まれる情報が広く知られている基本的な科学的真理であり、B にとって自明の事実であったとしても、yes ↓, that's right ↓, exactly ↓ の使用は不自然である。no ↓ の使用は、A の述べた情報が誤りであることを B が確信している場合でも、事実上不可能であるほど不自然であると言ってよいであろう。

以上の観察から、次の重要な事実が見い出される。話し手のなわばりのみに属する情報についての陳述に対して、聞き手は通例下降調の yes/no, that's right, you're correct, exactly など先行発話を明示的に支持する具現形で応答できない。つまり、これらの形式は最小限の認知の具現形としては不適切ということである。ただし、話し手の表現する情報が聞き手にとって既知の場合は、これらの形式が高いピッチの下降上昇調で発音されれば自然さは増す。が、非礼な印象は免れ得ないと指摘する母国語話者も多い。yes の変異形 yeah や [m], [mhm mhm] は、既に見たように認知の具現形として自然に用いることができる。

では、なぜ yes ↓/no ↓, that's right ↓ 等の形式は、この環境において認知の具現形として用いられないのであろうか。まず、この応答を行う聞き手は、話し手の発言に含まれる情報を自己のなわばり内に持っていないということが重要である。言い換えれば、聞き手はその情報を間接形を用いて陳述せねばならない立場にあるということである。that's right ↓, you're correct ↓ はその情報が自己のなわばり内にあることを示す直接形であるから、当然不自然な、そしてしばしば相手のなわばりを犯したことから生ずる非礼な発話となり得ることは言うまでもない。yes ↓/no ↓ は、それ自体直接形か間接形かは明らかでないが、通常、先行文脈より省略された要素が推定され、フル・フォームの応答文への復元が可能であるということに注意しなければならない。つまり、(12)では Yes, you are./No, you aren't のように、(13)では Yes, you do./No, you don't. のように推定されるのである。とすれば、yes ↓/no ↓ は直接形として機能しているとみなして差し支えないであろう。exactly ↓, of course ↓ 等の形式は先行文脈から推定される要素の一部または全部を新しい要素に置き換えた応答であると考えられる。事実、長い応答ではこれらの形式に後続できる要素は、yes/no に後続する要素と同一である。したがって、これらの形式もまた直接形の性格を持つものと考えてよいであろう。

以上、話し手のなわばりのみに属する情報についての陳述に対する聞き手の応答の形式を、move の最初に生ずる要素に注目して考察してきた。聞き手の立場から応答の形式およびそれに課される制約をまとめてみると次のようになる。話し手がそのなわばりのみに属する情報について陳述を行った場合、聞き手は応答の move の最初に情報の認知を行う。その act の具現形は下降調または水平調の yeah, [m], [mhm mhm] 等である。その情報が新情報である場合は oh, really または is it, do you 等の内容を問い直す表現も用いることができる。下降調の yes/no, that's right, exactly 等は情報のなわばりが聞き手にも属していることを示唆し、情報内容の新旧にかかわらず、不自然である。特に聞き手が情報内容を知悉していても不自然であることが重要である。また、話し手のなわばりを犯したことに由来する非礼な印象を伴うことが多い。ただし、聞き手にとって前言の情報が既知の場合、yes/no, that's right, exactly は、高いピッチの下降上昇調で発音されれば容認度は向上する。¹¹ また、yes/no の直後に間

接形が後続し、全体の発言が1つの音調句で発音されれば十分自然であるが、それが情報内容の反駁になる場合は非礼な印象をなお免れ得ない。前言の反駁は、優先応答体系¹²にしたがい、通例、疑問文あるいは間接形の表現による情報内容の問い直し、訂正の形式を取るが、ポーズ等の反駁を遅らせる要素などが伴い、非常に慎重な方法で行われる。それでもなお非礼な印象を与えてしまう危険が大きいため、あえて反駁しないというストラテジーも頻繁に用いられるようである。

2. b. の場合の応答の形式

ここでは話し手聞き手双方のなわばりに属している情報についての話し手の陳述に対する聞き手の応答の形式について考察する。この場合、話し手聞き手双方が直接形を用いて情報を表現できる状況にある。したがって、話し手の直接形の陳述に対して、聞き手も直接形を用いて応答することが予想される。(15)はこの場合の典型的な隣接対句である。

- (15) A: John has already returned home.
B: That's right.

(神尾 1990)

応答には That's right. が自然に用いられている。これは、既に見た聞き手のなわばりには情報が属さない場合には生じなかった形式であるが、この形式が直接形であることを考えればこの環境で生起するのは当然のことである。ところで、情報が話し手聞き手双方のなわばり内にある情報は、Labov and Fanshel の AB 事象、O 事象と重なり合う部分が多いと思われるが、¹³ Labov and Fanshel はこれらの事象についての陳述に対する応答は「最小限の応答」になると予測し、yes/no がその具現形として生じ得るとしている。実際の会話においては、応答の move の最初で容認・裏付けの act が生じ、その具現形の多くは直接形(およびそれに準ずる形)で表現されていたが、それらは必ずしも「最小限」とは限らなかった。

- (16) A: But remember that, as I said, America must have a cost of living about the same as here and the standard is about twice as high.
B: Yes ↓.
- (17) A: So they do have far more of the world's goods than we do, prorata.
B: Yes ↓.
- (18) A: There's been a fantastic amount of research done on reading.
B: Oh, yes ↓. Enormous.
- (19) A: Plastics are safer but scratch more. Yes ↓.
B: Exactly ↓.
- (20) A: That's the big question in linguistics, in law, in any kind of science, really.
B: Yeah →. That's right ↓. Yeah ↓.
- (21) A: But it does take literally a war or possibly a great national disaster like a flood.
B: Yeah ↓. I agree ↓. [m] ↓
- (22) A: He's a good chap.
B: He is ↓.

応答の move の最初には、水平調、下降調で発音される yeah, [m], [mhm mhm] も多く生

起していたが、先行する発話を明示的に支持する直接形のおよびその性格を持つ)容認・裏付けの表現も頻繁に起こっていたのが注目される。また、前者の形式は、反駁が後続する場合の見かけの容認としての機能も持っていることが興味深い。単独の oh, really や内容を問い直す表現は観察できなかった。情報が聞き手のなわばりにも属する情報は、通例聞き手が知り得ている情報であるから、これは当然のことであろう。重要なのは、応答の move の最初に現れる容認・裏付けの具現形が必ずしも「最小限」でなく、(20), (21)のように、同種の具現形が二度三度繰り返されている事例が多く見られたことである。反駁ではなく、前言を支持する容認・裏付けの act を遂行するには1つの具現形で十分であり、それ以上何かを言う必要はないように思われる。にもかかわらず、2つ以上の具現形が「量の格率」を破ってまで用いられているのはどういう理由によるものであろうか。そこで、さらに注意深く容認・裏付けの具現形が繰り返されている事例を観察して見ると、(21)の I agree からもある程度察せられるように、次のような事実に気づく。すなわち、意見・評価が含まれる情報についての陳述に対する応答に容認・裏付け表現の繰り返しが多く現れるということである。一方、事実を表す情報についての陳述に対する応答にはそのような繰り返しはあまり見られない。

(23) A: And he's got international reputation, as a bright man.

B: This is true ↓. He has ↓. Yes ↓. Yes ↓.

(24) A: Oh that side is noisier than this.

B: Oh certainly ↓. Yes ↓.

(25) A: Her husband was ill last term.

B: Yes ↓.

容認・裏付けの表現が繰り返されている(23), (24)において、Aは何らかの意見・評価を述べているが、繰り返しのない(25)ではAは単なる事実を述べているにすぎない。(25)における容認・裏付け表現の繰り返しは、文脈にもよるが、若干不自然であろう。この繰り返しの現象は、意見・評価の同意においては最小限の容認・裏付けでは不十分であり、前言を何らかの方法で強化する必要が生ずる場合があることを示している。このことは、意見・評価に対する同意において、前言で用いられた評価を表す語がさらに強い語によって置き換えられる現象が生ずること、強化されない同一語での繰り返しは yeah, [m] に似て、単なる認知として機能し、見かけの同意と解釈され得ることからも支持されよう。

(26) A: It's interesting.

B: Oh, it's frightfully interesting.

(27) A: It's interesting.

B: Interesting. (fabricated)

(26)では評価を表す interesting が応答において強意語によって強化されているが、これは容認・裏付けの表現の繰り返しと同じ効果を持つものと考えられる。(27)では評価を表す語が強化されず繰り返されているだけであるが、これは通例前言の明示的支持とは解釈されず、むしろ反駁が後続することを予想させる。会話が社会的活動である以上、できるだけ協調的態度を取り、相手の“顔”を立てるのが望ましいのは言うまでもない。同意に見られる繰り返しによる前言の強化は、同意が仲間意識を強化し、社会的であることを示す望ましい態度であるとみなされている1つの証差であり、交感的言語使用¹⁴の一側面と考えることができよう。

話し手聞き手双方のなわばりに属している情報についての陳述に対する聞き手の応答においては、yes/no または直接形の表現による反駁が可能である。しかし、応答の move の最初に

yes/no または直接形の表現が現れて反駁が行われる事例は、実際の会話においてはあまり見出し出されなかった。反駁の構造は、それが意見・評価に対するものか事実に対するものかで相違が見られる。前者においては、沈黙や er などのポーズ、見かけ上の同意を示す yeah, [m], ためらいを表す well, er などを用いて反駁を遅らせたり、聞き手の意見の表明をあえて間接形で行うなどのストラテジーが観察された。これは話し手のなわばりのみに属する情報についての陳述を反駁する場合のストラテジーと類似している。一方、後者においては、前者の場合と比べ、反駁の先送りは少なく、訂正情報提供の際の直接形使用が多くなっている。訂正情報のみをあえて間接形で表現するストラテジーが後者の中心であった。両者とも優先応答体系にしたがって、非優先的な応答が複雑な構造を取っている点は共通している。ちなみに、聞き手のみのなわばりに属している情報についての話し手の陳述に対する反駁は簡略な構造を持ち、yes/no または直接形の表現が頻繁に生起するという現象が観察されている。反駁の構造、ストラテジーを、話し手と聞き手の間の情報のなわばり関係に基づいて解明することは大変興味深い課題であるが、これについては Part2 で詳しく扱う予定である。

以上、話し手聞き手双方のなわばりに属する情報についての陳述に対する聞き手の応答の形式を考察してきた。聞き手の立場から応答の形式およびそれに課される制約をまとめてみることにしよう。話し手が話し手聞き手双方のなわばりに属する情報について陳述を行った場合、聞き手は応答の move の最初に情報の容認・裏付けを行う。その act の具現形には下降調の yes/no, that's right, exactly 等直接形のおよびそれに準ずる) 表現を用いることができる。yeah, [m], [mhm mhm] 等も使用可能であるが、これらは必ずしも明示的に前言を支持する表現とはなり得ず、時に反駁を予告する見かけの同意として機能する。前言に含まれる情報が意見・評価である場合には、明示的支持を表す表現の繰り返しが互いの連帯感、仲間意識を表明する社会的機能を担う。前言の反駁は yes/no または直接形の表現によって可能である。が、実際には優先応答体系にしたがい、ポーズや見かけの同意による反駁の先送りが行われ、聞き手による意見表明、訂正情報の提供には間接形が使用されることが多い。

Part2 では、既述の通り、(2) の c, d の場合の応答の形式、a ~ d の各場合の反駁の構造を扱う予定である。また、英語教育への応用の可能性についても言及したい。

(以下続く)

注

1. Labov (1972:252).
2. Mandelbrot (1965:263).
3. 神尾(1990)によって提唱されている情報のなわばり理論における概念で、話し手および聞き手と情報との心理的距離に基づく関係。詳細は服部(1994a)を参照。
4. adjacency pair の訳語。Shegloff & Sacks (1973) の用語で、要請-許可、誘い-承諾など最初の発言が後の発言を誘発すると見られる隣同士に位置する話し手と聞き手の1対の発言。
5. 本稿では現実の会話のデータを Svartvik & Quirk (1980) に仰いたが、筆者が作成した会話は母国語話者によるチェックを受け、その旨各会話に記してある。
6. 「発話開始」、「応答」など発話の機能上の単位で、1つのあるいは複数の act からなる。act は「同意」、「認知」、「申し出」など発話の意図に基づく会話の最小の単位。
7. 以下混乱を避けるために、陳述を行うものを話し手、それに対して応答を行うものを聞き手とする。
8. 各発話の ↓, → はそれぞれ下降調、水平調のイントネーションを表す。

9. ここでの容認度とは、考察の対象となっている文脈における発話の適切さの度合いのことである。
10. yes/noが独立した音調句で発音され、後に休止が置かれると容認度は低下する。
11. この場合でも yes/no を用いての情報内容の反駁は通例不可能である。
12. 人に物を頼まれたとき、応諾は Sure.などの簡単な形式で行われるが、拒絶は言い訳や遠回しな言い方をするなど手の込んだ複雑な応答になることが多い。このように、期待されている応答の場合とそうでない場合とでその形式に違いが見られ、その相違がパターン化していること。
13. 言うまでもなく、AB双方あるいはその場に居合わせた者全員がある情報を知っている場合、AB双方のなわばりにその情報が属するとは限らない。
14. phatic communion の訳語。Malinowski の用語で、雑談など互いの連帯感が作られるようなタイプの言語使用のこと。

参考文献

- Atkinson, J. M. & J. Heritage (eds.) 1984. *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Boden, D. & D. Zimmerman (eds.) 1991. *Talk and Social Structure*. Cambridge: Polity Press.
- Drew, P. & J. Heritage 1992. *Talk at Work*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hattori, M. (服部幹雄) 1994a. 「情報のなわばりと丁寧さ」, 『名古屋女子大学研究紀要』第40号人文・社会編, pp.253-264.
- Hattori, M. (服部幹雄) 1994b. 「日本語における間接形使用と丁寧さ」, 『言語文化学会論集』第2号, pp.89-98.
- Kamio, A. (神尾昭雄) 1990. 『情報のなわ張り理論』. 東京:大修館.
- Labov, W. 1972. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. & D. Fanshel 1977. *Therapeutic Discourse*. New York: Academic Press.
- Mandelbrot, B. 1965. "Information theory and psycho-linguistics," in Wolman, B. B. & E. Nagel (eds.), *Scientific Psychology*. New York: Basic Books.
- Manes, J. & N. Wolfson 1981. "The compliment formula," in Coulmas, F. (ed.), *Conversational Routine*. The Hague: Mouton, pp.115-132.
- Maynard, K. S. (メイナード・K・泉子) 1993. 『会話分析』. 東京: くろしお出版.
- Pomerantz, A. 1978. "Compliment responses: Notes on the co-operation of multiple constraints," in Schenkein, J. (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press, pp.79-112.
- Richards, J. C. & R. W. Schmidt (eds.) 1983. *Language and Communication*. London: Longman.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. 1994. *Approaches to Discourse*. Oxford: Blackwell.
- Shegloff, E. A. & H. Sacks 1973. "Opening up closings," *Semiotica* 8: 289-327.
- Stenström, A-B. 1994. *An Introduction to Spoken Interaction*. London: Longman.
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis*. Chicago: University of Chicago Press.
- Svartvik, J. & R. Quirk 1980. *A Corpus of English Conversation*. Lund: CWK Greerup Lund.
- Takahashi, T. & L. Beebe. 1993. "Cross-Linguistic Influence in the Speech Act of Correction," in Kasper, G. & S. Blum-Kulka (eds.), *Interlanguage Pragmatics*. New York: Oxford University Press, pp.138-157.